

倉橋惣三の誘導保育論の実際

—菊池ふじの「人形の家を中心にして」の実践記録をとおして—

高月 教恵

幼児教育学

Practicality of Sozo Kurahashi's Early Childhood Educational Theory of Guidance

—Through Report of Early Childhood Education of Fujino Kikuchi's "Ningyo-no-ie-wo-Chushin-ni-shite"—

Norie TAKATSUKI

(2000年11月1日受理)

倉橋惣三の誘導保育論について、菊池ふじの「人形の家を中心にして」の実践記録に基づいて考察した結果、誘導保育論の基盤になっているものは、子どもは自ら育つ力をもっているという子ども観であると考えられる。そして、菊池ふじの実践記録に基づいて誘導について考察した結果、誘導とは、「物的環境による誘導」「話し合い（言葉かけ）による誘導」「主題による誘導」「保育者自身の生活による誘導」「大仕掛けな製作活動（表現活動）による誘導」という内容を含むものであると考えられる。倉橋は、この実践記録を紹介しながら、幼児さながらの生活→（自由・設備）→自己充実→充実指導→誘導→教導という誘導保育論の方法のあらすじを示したと考えられる。また、森上史朗が、倉橋と幼稚園の関係について「彼の考えたことをそのまま幼稚園で実践したとか、幼稚園の実践を彼がそのまま理論化したとかいうようなものではなかったらしい¹⁾」と言っているように、菊池ふじの実践記録には詳しく書かれていない部分もあるので一概には言えないが、倉橋の誘導保育論と菊池ふじの実践とは、必ずしも同一であるとはいいがたい面もあると考えられる。

はじめに

倉橋惣三は、「幼稚園保育法真諦」の序文で、「幼稚園に関する私の研究は、すべて東京女子高等師範学校の附属幼稚園において、考えつ、行いつ、行いつ、考えつ、進められて来た。従って、いつでも同僚保母諸君の助けを借りたというよりも、協同研究で歩いてきたといった方がほんとうである。」²⁾と述べていることから、彼の保育論は、附属幼稚園の実践と切り離して考えることはできないと言えよう。そして、倉橋は、昭和8

年7月に日本幼稚園協会主催の保育講習会で、「幼稚園保育の真諦並に保育案、保育過程の実際」と題して講演を行い、この講演に加筆整理して、さらに附属幼稚園の5編の実践記録³⁾を載せて、「幼稚園保育法真諦」を出版している。坂元彦太郎は、「倉橋が幼稚園真諦において、突如提唱した誘導保育案における誘導保育は、長い間の研究と経験を通じ、お茶の水附幼の実践に接し、しだいに熟してきた構想を一挙に吐き出したものであった⁴⁾」と述べている。また、森上史朗は、「5つの実践は、すべて惣三が昭和8年7月に

行った講演以前のものであり、これらの実践は惣三の海外の新保育の実践の話などに刺激されて行われたもので、彼はそれらの実践を見ながら、自分の誘導保育案の構想を作りあげていったようである。⁵⁾と述べている。そしてまた、5編の実践記録のひとつの実践者である菊池ふじのは「幼稚園保育法真諦」の序文の共同研究について、「共同研究ということはないけれど、倉橋先生は私達のしていることを誉めてくださいましたね⁶⁾と言っていることから、倉橋の誘導保育案は、菊池ふじのらの実践に影響されたことがうかがわれる。

本稿では、乗原昭徳も言っているように⁷⁾、5編の実践記録の中で、菊池ふじの「人形の家を中心にして」の実践記録が、子どもの姿と保育者のかかわりについて具体的に詳細に記録されていることから、ここでは菊池ふじの「人形の家を中心にして」の実践記録に基づいて、倉橋の誘導保育論について考察する。

1 環境構成

菊池ふじの「人形の家を中心にして」の実践記録⁸⁾に基づいて、環境構成について、以下をまとめることにする。

この実践記録は、4才児40人⁹⁾を対象に3学期に実践されたものであると考えられる。

「人形の家」の環境構成における保育者の役割をあげると次のようになると考えられる。

- (1) 「人形の家」を中心として保育案を立てて見たいとかねてから念願し、暮に人形を二体揃える。
- (2) 子ども達が、人形で遊ぶ様子を見て、ある日の降園前に、人形を中心に話し合いの場と時間を確保する。
- (3) 翌朝、家での子どもの様子についての2人の母親の話から、早速に板や柱を取り寄せる。
- (4) 「この仕事では、柱等を切ること、かんなをかけること、釘を打つこと等を子供達に手伝ってもらいました¹⁰⁾とあることから、鋸・金槌・釘・かんなを準備している。
- (5) 骨組の大きさを決め、骨になる柱を準備す

る。

- (6) 床板の長さを測って準備する。
- (7) 窓枠・蝶番・ねじ鉋・ハンドル・セロハン・セルロイド・鍵・鍵の金具・ねじまわしを準備する（鉋を止める穴等は、あらかじめ金具にあわせてきりで穴をあけておく）。
- (8) 壁板の長さを標して準備する。
- (9) 「板の切り方だけを子供達に手伝ってもらって¹¹⁾とあることから、「天井のないお家は変だ変だ」「早く天井を張って頂戴¹²⁾という子ども達の要求により、保育者は天井の板の長さを標して準備している。
- (10) 塗料の準備する。
- (11) 壁紙を準備する。
- (12) カーテンの布地（生金巾）・ユーゼンクレヨン¹³⁾を準備する。
- (13) カーペット（地はグッツ・色は洪を塗って茶っぽくしまった地色）・模様¹⁴⁾の布（カタツムリは黄色・草はオリーブ色）・毛糸（カタツムリは黒色・草はオリーブ色）・毛糸針・金槌・釘鉋を準備する。
- (14) 倉橋の言葉かけにヒントをえて、ストーブの枠の木・釘・金槌・塗料・煙（綿を墨で塗る）を準備する。
- (15) バルコニー・クリーム色の塗料を準備する。

※家具

- 人形を買うとすぐ、子どもが布団のことを言うので、布団を作って、用意する。
- ベットのプランをたて、鋸ミシンをかけ、釘・金槌・塗料（薄緑色）を用意する。
- 椅子を作って、用意する。
- テーブルを作って、用意する。
- 真赤な郵便受けを用意する。

以上の実践記録と倉橋理論を対比させて考察すると次のようになる。

自己充実

- (1)のように保育者が二体の人形を揃えたことから、この活動は展開したと考えられる。そして、(2)のように、子ども達が人形と遊ぶ様子を見て、保育者が積極的に話し合いの場と時間を確保したことによって、クラス全員の「人形の家づくり」

に対する共通概念が明確になり、発展していったと考えられる。さらに、保育者は、母親の話から子ども達が昨日の話し合いの人形の家づくりに興味をもっていることを知ると、早速計画を立てて、積極的に製作材料や用具を整えていっている。(9)のように子どもの要求により保育者が天井の板を用意したり、※の家具のように子どもが布団のことをいうので保育者が布団を作って用意していることから、保育者は子どもの様子をみながら製作材料や用具を準備していることも窺われるが、子ども達が製作材料や用具を整えたりして積極的に環境構成にかかわっている様子はみられない。このことから、「人形の家づくり」は保育者の計画に基づいて、保育者が積極的に製作材料や用具の物的環境を構成していっているといえよう。このように保育者が積極的に物的環境を構成したことによって、遊び(仕事)¹⁴⁾の枠組みを明確にしたと考えられる。そして、このように遊び(仕事)の枠組を明確にしたことが、「人形の家づくり」を発展させた大きな要因になっていると考えられる。

この実践をふまえて、倉橋は「幼児の生活それ自身の自己充実に信頼して、それを出来るだけ発揮させて行くということに、保育法の第一段を置くとして、それには幼稚園として適当な設備を必要要件とします。この意味において、幼稚園とは幼児の生活が、その自己充実力を充分発揮し得る設備と、それに必要な自己の生活活動の出来る場所であると、……とにかく設備なしに自己充実を充分にさせることは出来ません。設備によってこそ生活が発揮される。」¹⁴⁾と言っている。つまり、幼児さながらの生活に幼児の十分な自由な生活と物的環境(設備と生活活動の出来る場所)が整えられることによって、子どもは自発的にその物的環境とかかわって活動し、自ら自己充実するというのである。以上のことから倉橋は「幼児さながらの生活—(自由・設備)—自己充実」¹⁵⁾というように図式であらわしたと考えられる。

さらに、倉橋は、保育者の物的環境の構成のあり方について次のように述べている。「先生が自身直接に幼児に接する前に、設備によって保育するところであります。しかも設備は、ある場合に

おきましては、自然の状態のままを利用していることもありましようが、それにしても、幼稚園という中に取入れられている限りでは、その設備の背後には、先生の心が隠れているわけです。ですから設備とだけいっても、その設備の心の中に、先生の教育目的が大いにはいっているのであります。しかも、設備を通して行きますので先生は先生の教育目的が幼児の生活へ直接的にはぶつかって来ません。ところが、その設備がよく出来ていなくても、子どもがその設備にあまりに束縛されていくのであっては、かえってこうした間接作用になりません。そこでこの点における大きな心づかいが必要で、幼児の生活が自己充実を充分発揮し得るように、適宜適切な設備をしておきつつ、しかも幼児めいめいにその設備を使わせて行く幼稚園全体の態度が、一すなわち、子どもに生活の自由が充分ゆるさされているものでなければなりません。」¹⁶⁾つまり、幼稚園における保育とは、保育者が子どもを直接指導するのではなくて、物的環境(設備・生活活動のできる場所)を通してする間接指導であるというのである。だから、保育者は物的環境を構成する時には、保育者の心(教育目的を含む)をこめてするとともに、子どもをよく観察して、子どもが十分自己充実ができるように配慮し、子どもがその物的環境のもとで自発的に十分活動できる自由を保障する必要があるというのである。

さらに、「これを相当大仕掛にやっつけていけることに、幼稚園の存在価値があるといつてよいのです。」¹⁷⁾といっているように、幼稚園であるからには、家庭ではできない大仕掛な物的環境(設備)が必要であるというのである。

2 子どもの姿と保育者のかかわり(態度・言葉かけ)

菊池ふじの「人形の家を中心にして」の実践記録¹⁸⁾に基づいて、子どもの姿と態度・言葉かけを中心に保育者のかかわりについて、以下をまとめることにする。

「人形の家」の子どもの姿と保育者の態度を中心としてのかかわりについてあげると、次のよう

になると考えられる。

(1) 保育者は「人形の家」を中心として保育案を立ててみたいと願ひ、二体の人形の物的環境を整える。女の子は話にならない程喜び、今まで人を支配していた子どももその関心の全部を人形にそそぎ、男の子も代わり合って抱っこしたりねんねさせたりする。その子ども達の光景に保育者は涙ぐむ。

(2) ある日の午後の帰る時間の前、保育者は話し合いをして、「人形の家づくり」の案を出し、子ども達は保育者の案に賛同する。

話し合いの内容についてあげると、次のようになる。

①保育者は人形で遊ぶ子ども達の美しい様子を見て、ある日の午後、降園前、組の子ども達みんなに話す。「この二人のお人形は姉妹で、昨日アメリカから来たばかりです。お姉さんはメリーさんと云ひ、妹さんはマリーさんと云ふお名まへです。お友達もまだ出来ませんし、お家也没有せん。おべべも今着てるだけなのです。ほんとうに淋しいのですから、これからは、みんなでよく遊んであげませうね。それから不自由なものを男の子も、女の子も、みんなで作ってあげませうね」という。

②保育者はどんなものを作ってあげましょう？みなさんで拵えて上げたいと思ふものを云って頂戴」とたずねる。子ども達は「お布団」「お机」「お椅子」と後から後からいろいろ言う。

③保育者はなかなかこっちの計画にはまってくれないと思ひ、子ども達に予期するのは無理だと判断し、「先生はね、このお人形さんのお家を拵へて上げたいの」と言う。男の子は「そうだね、お家を拵へて上げるといいね」と言って賛成する。

④保育者は「そしてね、そのお家に、お窓をつけて、カーテンを下げませう。そのカーテンの様子はみんな描きませうね。それからお家の床板に敷く敷物も欲しいの、そして敷物には、みんな考へて何かぬひとりをしてませうね」と云う。目を輝かしていた子ども

達はコックリとうなづく。

⑤保育者は「敷物が出来たら今度は、お人形さんのベットも拵えませう、それからお机もお椅子も作りませう。お家が出来たら今度はお庭の方にお花畑も作りたいし、温室も作りたいの。それから、お馬も飼ひたいし、豚も牛も飼ひたいの」と続ける。子ども達の目はいよいよ輝いてくる。

⑥保育者は「かうしてメリーさん達のお家が出来たら、今度は、メリーさん達の買物に行く町を作りたいと思ひますね」と子ども達に賛成を求める。子ども達はみんな黙って頭をコックリして賛意を現す。

⑦保育者は「その町に、どんなお店をつくりませうか」とたずねる。子ども達は「おもちゃ屋」「お菓子屋」「お菓」「ラヂオ屋」「お魚屋」「靴屋」「紙屋」「お花屋」と競って答へ、なかなか尽きそうにない。

⑧一通り済んでから、保育者は「じゃ、お人形さんが町へ買物に行く時に何に乗って行きませうか？」と聞く。男の子等は、吾れ先に「電車」「自動車」と答へる。保育者は「さう、その電車も自動車も拵えませう、そういふのは男の方達一生懸命拵へて頂戴ね」と言う。自信ありげな男の子等はうなづく。

⑨保育者は「それから、町が出来たら、今度は、町の郊外に、お人形さんの遊びに行く登島園の様なものも作りませう。それから池の組でこしらへていらした様な水族館も作りませう。森の組でお作りになったあの動物園も作りませうね」と言う。子ども達は嬉しげにうなづく。お帰りの時がきたので、話し合いは終わる。

(3) 降園後の子どもの家庭での様子についての母親の話から、保育者は、早速に板や柱を取り寄せて、実行にとりかかる。

(4) 保育者は、家は人形の家であると同時に、また子ども達の家として遊べるように心がけて計画する。計画の始めは、出来るだけ粗におおまかに考える。

(5) 保育者が骨組作りの環境を整え、柱を切ったり、骨組をたてる。子どもは木を切ったり、組

み立てのお手伝いをする。子どもが手にとげを刺すので、保育者がかんなをかけた方がいいと思ひ、子ども達と代わり合っかんなをかける。子ども達は、柱を切ること・かんなをかけること・釘を打つことを手伝う。初めのうちは、鋸を持つことは持つても、まるで動かせなかつた弱々しそうな子どもでも、こうして1週間か、2週間続けておると驚くほど上達して、一人残らず自由に切ったり打ったり出来るようになった。

- (6) 保育者は床板の長さを測って線を引く。子ども達は床板を切り、釘を打つ。
- (7) 保育者は窓枠を作って、開き戸にして、蝶番で取り付ける。正面玄関も2枚の開き戸にして梯形の装飾兼窓のような物を作り、蝶番で留める。保育者はセロハンを張る。すると、子ども達がとんとんと打って喜び、あっちが破け、こっちが弛む。そこで保育者は窓にセルロイドの厚い方のものを張ることにする。子ども達は好奇心からかなり触ったりたたいてみたりする。保育者は窓にも玄関の戸にも、内から鍵をかけられるようにし、玄関の戸にハンドルをつける。ここでは、子ども達は蝶番のねじ鋏をとめるだけをするが、競って手伝う。
- (8) 保育者は壁の板の長さを標し、子ども達が板を切り、打ちつける。ひとりが釘を打ち、他の二人は、板を押さえて助け上げる。次に交替して、嬉しげな顔です。その様子を、保育者はたまらなくうれしく思う。
- (9) 子ども達は、床板が張られた頃から、「天井のないお家は変だ変だ」と語り合う。「早く天井を張って頂戴」とせがむ。子ども達の要求により、天井に取りかかる。保育者は天井の板を用意し、子ども達が切る。子ども達では手が届かないので、保育者達で天井を張る。
- (10) 一通り、極く雑な家が出来あがると、保育者は、綺麗な洋服を着た人形とあまりにも隔たりすぎると思ひ、家の外側を塗ったり、内側に壁紙を貼ることに決める。塗料の研究をして、マンローを使うことにし、倉橋の言葉にヒントを得て、外はクリーム色、窓は水色に決め、塗り始める。子ども達は「塗りたい、塗りたい」と

言い、喜んでまたたくまに塗る。玄関の戸も、天井もクリーム色に塗る。

- (11) 保育者は、早く壁紙を貼ってみたいくなる。保育者は、壁紙の研究（紙質・模様・色合い・貼り方）をする。子ども達は下張りのみを手伝い、保育者は上張りをする。
- (12) 保育者は一日も早く、カーテンとカーペットがほしくなる。保育者は、カーテンの布とクレヨンを用意する。子ども達はひとり残らず執筆し、全部（両側と後ろの3枚）のカーテン模様を描く。保育者は、アイロンをかけ、周りにミシンをかけ、かんをつけ、カーテン棒を通し、仕上げる。（カーテンはこの家にとりかかった直後から、とりかかっている。）始めは、カーテンの模様を子ども達に考えてもらうことにする。カーテン大の模造紙に子ども達に絵を描いてもらうが、子ども達は思い思いの絵を描き、保育者はまとまりがないと思う。保育者はいい模様を思い当たり、子ども達に見せて、一単位ずつ子ども達に描いてもらう。
- (13) 保育者は、カーペットの布・模様の布・用具等を用意する。（カーペットはこの家にとりかかった直後から、とりかかっている。）カーテンの時と同様で、保育者は、始めは子ども達から描くものからヒントをえようとしたが、保育者の気に入った模様を子ども達に話して了解を求めて描いてもらっている。子ども達は、カタツムリの輪郭を描いて、切り取り、草やカタツムリをかえし針でおさえる。全員の子どもが縫い取りをする。多い子どもで十回以上、少ない子では4・5回は針を持つ。かえし針で、草やカタツムリをおさえたので、これをする時は、針の運びと布をはずさずに抑えるという両方の働きを兼ねなければいけないので子ども達は、かなり緊張した様子であった。一度教えてあげればよくのみこんで、二針三針目頃からは独りでどんどん縫っていく子どももあれば、また幾度教えても、針が進むどころか、見当もつかない方へ飛ぶような子もあってなかなか思うようにはかどらない。漸く出来あがったカーペットを、保育者は、釘鋏で床に打ちつける。
- (14) 保育者は、一通り出来あがった家を、子ども

達相手に、飽かず眺める。子ども達は、先生の傍らで黙って見入る。通りがかりの倉橋の言葉かけにヒントをえて、保育者は、大きさ・格好・色を考えて、ストーブを拵えて、窓の下にはめ込む。石炭入れも、火箸も、十能も子ども達といっしょに作る。煙突も、木で作り、煉瓦のように彩色する。子ども達は喜んで釘を打ち、授色を手伝う。保育者は、煙も作る。

- (15) 保育者はバルコニー（クリーム色）を乗せる。子ども達は、異様の興味をもつ。

※家具

- 保育者は人形を買うとすぐ、子ども達の要求で人形の布団を作る。
- 人形を寝かす場所がないので家づくりにとりかかるとすぐ、保育者はベットの製作（プラン・鋸ミシン）にとりかかる。子ども達は釘を打つこと、塗ることを手伝う。
- 保育者は椅子・テーブルを作る。
- 保育者は、電池も備えて、電球もつけられるようにしてスタンドを作る。男の子の喜びようはたえようもなく、保育者はスタンドが壊れそうになるので、電池をはずしてたびたび隠す。
- 保育者は真赤な郵便受けを作る。英語の得意な子どもにレスラーと書いてもらう。

このようにして、三学期はほとんどこの家を中心に通す。「人形の家」が出来あがると、男の子も女の子も、この家を中心に遊ぶ。他のクラスの子も遊びに来る。保育者はこの家を中心に次々と思いを膨らませ胸踊らせる。同時に、一人ひとりに目をむけることを忘れてはいけないと自身をたしなめる。

以上の実践記録と倉橋理論を対比させて考察すると次のようになる。

話し合い

まず、保育者は(2)の①のように子ども達に人形について話すことによって、子ども達の二体の人形に対するイメージを共通にしていると考えられる。そして、保育者は子ども達に「どんなものをつくってあげましょうか？」とたずねると、子ども達は「お布団」「お机」「お椅子」と次々と答える(②)。この子ども達の様子から、子ども達が

主体的に人形とかかわっていることがうかがえる。しかし、子ども達はなかなか保育者の計画にはまってくれないので、③のように「先生はね、このお人形さんのお家を拵えて上げたいの」と子ども達に提案する。このことによって、保育者の思いも子どもの思いも「人形の家づくり」に発展する(③)。保育者は、子ども達の様子を見ながら、窓・カーテン・敷物・人形のメリーさん達が行くお店・町に行くための乗り物・町の郊外の建物づくり（水族館等）へと話を進め、「人形の家づくり」の子ども達のイメージをふくらませていく。子ども達は保育者の話に目を輝かせてうなづいたり、答えたりしている様子から、子ども達が主体的に話し合いに参加している様子が見える。

このように話し合いをもったことによって、「人形」から「人形の家づくり」へと、子どもの思いが発展し、子どもの「人形の家」に対するイメージも具体的にふくらんだと考えられる。つまり、保育者の言葉かけによる「人形の家づくり」への誘導といえよう。

充実指導

保育者は子どもが「人形の家づくり」に対して興味をもっている様子を知る(3)と、家は人形の家であると同時に子ども達の家として遊べる様に計画を立てる。しかし、(4)のように、計画のはじめは出来るだけ粗におおまかに考えたようである。

いよいよ、人形の家づくりである。

骨組を組み立てる場面(5)において、まず保育者は環境を整え、柱を切ったり、骨組を立てる。子どもは木を切ったり、組み立ての手伝いをする。保育者ははじめの計画は粗におおまかに考えていたが(4)、子どもが手にとげを刺すのでかんなをかけた方がいいと思い、柱も板も子ども達と代わり合っただけかんなをかける。子ども達は、かんなをかけること、釘を打つことを手伝う。始めのうちは弱弱しかった子どもも、1・2週間続けると、一人残らず自由に切ったり打ったり出来るようになる。次に、保育者は床張りにとりかかる(6)。保育者は床板の長さを測って線を引き、子ども達は床板を切り、釘を打つ。そして、保育者は窓や玄関の戸にとりかかる(7)。窓枠や玄関の戸について

は、保育者がつくり、窓にセロハンをはる。すると、子ども達がとんとんと打って喜び、あっちが破け、こっちが弛む。そこで保育者は窓にセルロイドを張ることにする。子ども達は好奇心からかなり触ったりたたいてみたりする。また、ここでは子ども達は戸をはめる蝶番のねじを締めただけをするが、競って手伝うとある(7)。この子ども達の様子から、子ども達がとても興味をもっていることがうかがえる。続いて、保育者は壁づくりにとりかかる(8)。保育者は板の長さを標し、子ども達は板を切り、打ちつける。ひとりが釘を打ち、他の二人は、板を押さえて助け上げる。次に交替して、嬉しげな顔をする(8)。この様子から、子ども達の充実感が伝わってくる。さらに、子ども達は、床板が張られた頃から、「天井のないお家は変だ変だ」と語り合う。「早く天井を張って頂戴」とせがむ(9)。このことから、保育者の計画に基づいて、保育者が主導となって進められている「人形の家づくり」ではあるが、子ども達もまた主体的に家づくりにとりくんでいると考えられる。

倉橋はこのような保育者と子ども達の様子を見ながら、「出来るだけ設備が与えられ、幼児の生活的自己充実が一ぱいに発揮させられたとしても、自己充実そのものでは足りません。幼稚園としては、これをもう一つ手伝わなくてはなりません。その点を私は充実指導という言葉で挙げてみたのであります。」¹⁹⁾と述べている。そして、充実指導について「充実指導とは彼等において自己充実が出来ているかどうかというところに重きをおいて指導するのです。…私が特に充実指導と申すのは、子どもが自分の力で、充実したくても、自分だけでそれができないところを、助け指導してやるという趣旨であります。」²⁰⁾と述べている。具体的には、「ブランコに乗って子どもが漕いでいる。ブランコは設備であります。そしてどうやったらよく漕げるかと、自己充実でやっている。けれどもどうも思うようにいかない。そこへ先生が来て下さって、その子としてはこの位まで行きたいと思うところを指導する。これが私のいう充実指導であります。」²¹⁾と説明する。このブランコの充実指導は、骨組づくりの「初めのうち

は、鋸を持つことは持っても、まるで動かせなかった弱弱しそうな子どもでも、こうして一週間か、二週間続けておると、驚く程上達して、一人残らず自由に切ったり打ったり出来る様になった。」(5)やカーペットづくりの「この縫い取りは全部の子どもがする。多い子どもで10回以上、少ない子では4・5回は針を持つ。かえし針で、草やカタツムリをおさえたので、これをする時は、針の運びと布をはずさずに抑えるという両方の働きを兼ねなければいけないので子ども達は、かなり緊張した様子であった。一度教えてあげればよくのみこんで、二針三針目頃からは独りでどんどん縫っていく子どもあれば、また幾度教えても、針が進むどころか、見当もつかない方へ飛ぶような子もある。しかし、この縫い取りは全部の子どもがしたのである。」(13)に通じるものであるといえよう。しかし、骨組づくりにおいて、上手な子どももいれば、なかなかできない子どももいることがうかがわれる。また、縫い取りにおいても、10回以上針を持つ子どももいれば4・5回の子どものもいることから、保育者はすべての子どもに同じように指導するのではなく、個々の子どもにあったやり方で充実指導をしていることがうかがえる。このことについて、倉橋は「多々益々可なり、大は小を兼ねるという風の、そんなに簡単な原理で保育が出来るものならやさしいことですが、真の保育法としては、この子がどの位まで求めているかということから始められなければならないのであります。そこからが真の保育になってくるのです。またこれが実に保育法としての肝心の要点だと思います。…これこそが保育法の正しいコツです。」²²⁾と述べている。つまり、充実指導において一人ひとりの子どもにあったやり方することはなかなか困難なことであるが、子どもの個性を尊重して充実指導をしなければいけないと主張しているといえよう。

また、保育者の所在について「指導という言葉が出る以上、前の自己充実だけの場合に比べると、よほど、教育者の働きが加わってきています。ここでは、教育者がすでにおもてに出ております。つまり、教育者と子どもとの間に教育者からの働きが始まっているのです。」²³⁾と述べてい

る。しかし、「前に設備と自由との後に隠れたる先生、と申した、その先生がこの段階では少し直接に働き出したのですけれども、まだまだでしゃばってはなりません。充実を助けるために、先生は少し出てきますけれども、自分も子供になって、一子供の内に入って一、子供のしている自己充実を内から指導していただけですから、その先生の所在は、子供にも見物人にもちっとも目立たないでしょう。それでいいし、それでこそ、ほんとうなのです。」²⁴⁾と述べている。

誘 導

このように充実指導をしながら、「人形の家づくり」では、保育者は、骨組→床板→窓・戸→壁→天井→塗装（家の外側・窓枠・戸・天井）→壁紙→カーテン・カーペット（家にとりかかった直後からとりかかっている）→ストーブ→バルコニーへと製作を進めていく。そしてまた、布団（人形を買うとすぐ）・ベッド（家づくりにとりかかるとすぐ）・椅子・テーブル→スタンド→郵便ポストへと製作を進めていく。この人形の家づくりの進行は、保育者の計画に基づいて行われたものであるといえよう。

倉橋は、この「人形の家づくり」の一連の流れを見ながら幼児生活の誘導について述べていると考えられる。まず、幼児生活の誘導について「その（充実指導の）次に至って幼児生活の誘導ということが始まってきます。誘導となると、子供より大人の方がずっと多く働くことになります。」²⁵⁾と述べている。そして、幼児の生活について「幼児生活というものは、その大きな特色として、実に刹那的であり断片的であるということは、幼児の生活として決してとがむべきではありませんけれども、そのために、真の生活興味が、もっと味わえそうなのが味わえないでいるのは遺憾なことであります。」²⁶⁾と述べている。さらに、「子供が断片的に生活していくことは、それぞれとしてはよろしいが、その断片性に、あるいは中心を与え、あるいは系統をつけさせることが出来たら、興味が一段と広く大きくなって来るだろうと考えられます。」²⁷⁾という。そのことについて、コース料理と一品料理の食事の例をだして「コー

スを辿って食べていきますと、一皿一皿の味のほかに、食事の快感というものが起る。ここに大きな力があるのです。」²⁸⁾と具体的に説明し、「断片よりも系統の方が、単に興味の分量において、まさっているだけでなく、その興味の本質が違ってきます。生活の真の面白味がだんだんそこに入ってくるのです。」²⁹⁾と述べている。そして、誘導について「その意味からして、幼児の生活を、生活としてだんだん発展させていくことになります。すなわち、ここに誘導の問題が起ってくるのであります。指導だけならば…その子のその時を指導していればいいのですが、誘導となるとそれ以上のことです。」³⁰⁾と、誘導について言及する。さらに、附属幼稚園の「駅」や「水族館」の実践事例（ここでは菊池ふじの「人形の家」はあげられていない）をだしながら、「幼稚園という所は、生活の自由感が許され、設備が用意され、懇切、周到、微妙なる指導心をもっている先生が、充実指導して下さると共に、それ以上に、さらに子供の興味に即した主題をもって、子供たちの生活を誘導して下さるところでなければなりません」³¹⁾と述べている。つまり、主題によって、子ども達を誘導しなければならないというのである。

さらに、「設備と自由とによる自己充実から、直接の個人的充実指導位までは、家庭でもいづらか出来ることですが、誘導となると、一般家庭ではむずかしいことです。これを相当大仕掛にやっつけていけることに、幼稚園の存在価値があるといつてよいのです。一大仕掛だからよく誘導出来る所に、一」³²⁾と述べている。つまり、菊池ふじのの実践では、大仕掛けな「人形の家づくり」に取り組んで誘導していつている。この様子を見ながら、倉橋は、大仕掛けだからこそよく誘導できるし、そこに幼稚園の存在の意味もあるということを実感として述べていると考えられる。このことから、倉橋は、主題による誘導と考えあわせて、大仕掛けな製作活動（表現活動）による誘導ということを述べているといえよう。

また、保育者の所在について、「誘導となると、子供より大人の方がずっと多く働くことになります。」³³⁾と述べている。つまり、「幼稚園の先

生は、…幼児たちのために、指導することにおいて、誘導することにおいて、…実に周到な、実に細やかな活動をしている人でなければなりません³⁴⁾といい、「しかも、先生の役目は、…どこまでも子供の生活を主にしているのですから、先生の存在は、子供の後にいて極めて目立たないものでなければなりません³⁵⁾」というのである。具体的にそれはどういうことなのか、「人形の家づくり」での保育者の様子から考えると、次のようになる。保育者は「人形の家」を中心として保育案を立ててみたいと願う。人形で遊ぶ子ども達の様子を見て涙ぐむ。子ども達と話し合いをし、材料を取り寄せ、計画を立て、子ども達といっしょに人形の家づくりをする。子ども達が交替しながら助け合って壁の板を打ち付ける様子を見て、たまらなくうれしくなる。一通り、雑な家が出来上がると、綺麗な人形と釣り合わないと思い、塗料を塗ったり、壁紙をはることに決める。塗料を塗ると、早く壁紙を貼ってみたいくなる。壁紙を貼ると、一日も早く、カーテンとカーペットがほしくなる。一通りできあがった家を、子ども達相手に飽かず眺める。この家を中心に次々と思いを膨らませ、胸躍らせる。以上のことから、保育者は、話し合いをしたり、計画を立てたり、環境を整えたりして、誘導している様子がうかがえるが、それ以上に、保育者自身が、子ども達といっしょに、楽しんで、身も心も打ち込んで、人形の家づくりをしている様子がうかがわれる。だからこそ、子ども達もまた人形の家づくりに主体的に取り組んだと考えられる。このことから、倉橋は「先生は先ず自ら生活しているのでなければなりません。…誘導保育案を成功させるには、先生は子供の前に立たず、子供の前から生活しているのです。」³⁶⁾といている。つまり、保育者自身の生活による誘導といえよう。

また、倉橋自身についてみても、塗料について「現実味のない、フェアリーの住むようなファンシブルなものにするといい³⁷⁾」と言ったり、通りがかりに「あ、この家にストーブがあるといいな、それから、実際の連絡がなくても、煙突が立つといい³⁸⁾」と言っていることから、倉橋自身もまた「人形の家づくり」において共にそこで生活

をしている人でもあったと言えるのではないかと考えられる。

教 導

倉橋は、教導について「誘導の後に、始めて教導ということが出てきます。…教導というのは何かと申しますと、幼稚園教育としては最後にあって、むしろちょっとするだけのことであります。」³⁹⁾といている。具体的に、水族館の魚づくりで子どもが自分でいろいろ作った後に他の魚を聞きにきた時に教えるとか、聞きに来なくてもその子の知識を加えるために教えることであると説明している。さらに「こっちの標準へ引き寄せる教導⁴⁰⁾」というようにも述べている。菊地ふじの「人形の家づくり」における教導ということになると、※の郵便受けに“レスラー”と子どもに書いてもらったことになると考えられる。

しかし、倉橋は「幼稚園というのは、それよりも前のところが大事なのです。つまり、幼稚園はどこまでいっても、幼児の生活の生活たる本質をこわさないで、教育していくところに、その方法の真諦が一先生の苦心も一存するのです。」⁴¹⁾といて、幼稚園においては教導よりも、幼児さながらの生活・自己充実・充実指導・誘導の大切さを強調しているといえよう。

以上のことをふまえて、倉橋は、誘導保育論を次のような図式で、その方法論のあらすじを示したと考えられる。

幼児さながらの生活→（自由・設備）→自己充実→充実指導→誘導→教導

倉橋理論と実践のずれ

菊地ふじのの記録によると、(12)のカーテンの模様については「カーテン大の模造紙に、男の児、女の児共同で描いて見てもらいましたが、みんな思い思いの絵を描いて、纏りも連絡も見られませんでした。これも子供らしくていいかもとも思いましたが、その中、いい模様を思い当たりましたが、その絵を見せ、一単位づつ子供等に描いてもらって、全部のカーテンを描きました。」⁴²⁾とある。また、(13)のカーペットの模様についても「初

めは、子供達の描くものからヒントを得ようとして見ましたが、カーテンの時と同様の有様で、その中また、いつか見た気に入った模様を思い出しましたので、この事を子供等に話して諒解をもとめたのでした。』⁴³⁾とある。模様の決め方については、それ以上（話し合いがあったのか、どのように誘導していったのかについて）詳しく述べられていないので一概には言えないが、模様の決め方は、誘導というよりも倉橋のいう「こっちの標準へ引き寄せる教導」⁴⁴⁾ということになるのではないかと考えられる。しかし、倉橋は「教導というのは、……幼稚園教育としては最後にあって、むしろちょっとするだけのことであります。』⁴⁵⁾というのであるから、模様の決め方については、保育者があまりにも前に出すぎているように感じられる。森上史朗は、倉橋と附属幼稚園の関係について「彼の考えたことをそのまま幼稚園で実践したとか、幼稚園の実践を彼がそのまま理論化したとかいうようなものではなかつたらしい。…坂元彦太郎によると、…園内では、それぞれの保育者が自分の主体性において保育を行っている。惣三はそれをやや斜めに見ながら、どこをどうすればさらに良いものになるかを考え、それを理屈づいて講習会で話したり雑誌や本に書いたりした。』⁴⁶⁾と述べているように、「人形の家を中心にして」では、ここに、倉橋理論と実践のずれがあるのではないかと考えられる。

おわりに

菊地ふじのの實踐記録に基づいて倉橋の誘導保育論について考察した結果、實踐記録における誘導とは次のよう内容を含むものであると考えられる。

- 物的環境による誘導
- 話し合いに（保育者の言葉かけ）による誘導
- 主題による誘導
- 保育者自身の生活による誘導
- 大仕掛けな製作活動（表現活動）による誘導

このような実践例を紹介しながら、倉橋は、幼児さながらの生活→（自由・設備）→自己充実→充実指導→誘導→教導という誘導保育論の方法の

あらすじを示したと考えられる。さらに、誘導保育論の根底に流れているものは、子どもは自ら育つ力（自己充実・精進感）をもっているという子ども観であるといえよう。

本研究では、菊地ふじのの實踐記録に基づいてのみ考察するに終わったが、今後は残る4編の實踐記録についても考察をしたいと思っている。また、系統的保育案の實際についても考察を深めるつもりである。

「幼稚園保育法真諦」は、昭和9年7月に発行され、昭和28年6月に、「幼稚園真諦」として再刊されている。新版では、5編の實踐記録はすべて削除されている。この理由について、森上史朗は「その一つは、当時は保育項目をそのまま子どもに与えるような保育がほとんどであって、誘導保育をいかにわかり易く説明しても多くの保育者には理解が困難なところがある。それで具体的な實踐記録をつけることで、誘導保育ということへのイメージがもちやすく、また理解を助けるというねらいがあったのではないか。それが、戦後は誘導保育的な實踐がかなり普及して、特に實踐記録をつけなくても、誘導保育についてのイメージがもてるようになったからではないかと推察される。もう一つは、自然な生活形態を徹底していった場合、旧版に掲載されているような實踐は、必ずしも彼が理想とする保育と一致しなくなったということがあるのではないだろうか。』⁴⁷⁾と述べている。後者の理由から、森上は、倉橋理論と實踐とのずれがあることを指摘していると考えられる。本研究においても、そのずれの一部を窺うことができるが、倉橋理論と實踐とのずれについても、今後の課題にしたいと考えている。

この研究にあたり、ここに至るまでのご指導をいただきました山陽学園大学故秋山和夫学長に心より謝意を表します。

注

- 1) 森上史朗「子どもに生きた人・倉橋惣三」フレーベル館 1993 p.312
- 2) 菊池ふじの監修「倉橋惣三保育法講義録」フレー

- ベル館 p.311
- 3) 5編の実践記録とは、次の実践記録のことである。①「旅へー東京駅からー」新庄よしこ（昭和8年11月記）②「人形のお家を中心にして」菊池ふじの（昭和8年11月記）③「大売出しあそび」神原キク（昭和7年1月記）④「わたくし達の自動車」徳久孝子（昭和7年7月記）⑤「特急列車うさぎ号」村上露子（昭和7年7月記）。森上「前掲書」p.294
- 4) 坂元彦太郎「倉橋惣三その人と思想」フレーベル館1976 p.169
- 5) 森上「前掲書」p.294
- 6) 菊池「前掲書」p.233
- 7) 乗原昭徳「間接教育の構造」ぎょうせい平成6年 p.143
- 8) 菊池ふじの「人形のお家を中心にして」『幼児の教育』第32巻11号 pp.54-64
- 9) 「幼稚園真諦」に「一組40人をもって組織されたあの部屋の中で、…」とあることから、40人を対象にしたと考えられる。倉橋惣三「幼稚園真諦」『倉橋惣三選集』第一巻 p.19
- 10) 菊池ふじの「人形のお家を中心にして」前掲書 p57
- 11) 同上書 p59
- 12) (11)に同じ
- 13) 倉橋は「幼稚園の一日の保育は、自由遊びからだんだんにまとまったものになっていくべきものだと思います。…とにかく自由遊びから仕事へというのが保育過程の本質だと信じます。」と言っていることから、「人形の家づくり」における遊びは仕事へと発展していったと考えられる。倉橋「前掲書」p.94
- 14) 同上書 p.31-32
- 15) 同上書 p.57
- 16) 同上書 p.32
- 17) 同上書 p.46
- 18) 8)に同じ
- 19) 同上書 p.35
- 20) 同上書 p.37
- 21) 同上書 p.38
- 22) 同上書 pp.38-39
- 23) 同上書 p.35
- 24) 同上書 p.40
- 25) 同上書 p.42
- 26) 同上書 p.42
- 27) 同上書 p.43
- 28) 同上書 p.43
- 29) 同上書 p.44
- 30) 同上書 p.44
- 31) 同上書 p.45
- 32) 同上書 p.46
- 33) 同上書 p.42
- 34) 同上書 p.42
- 35) 同上書 p.42
- 36) 同上書 p.42
- 37) 菊池ふじの「人形のお家を中心にして」前掲書 p.59
- 38) 同上書 p.61
- 39) 倉橋「前掲書」p.47
- 40) 同上書 p.39
- 41) 同上書 p.47
- 42) 菊池ふじの「人形のお家を中心にして」前掲書 p.60
- 43) 同上書 p.61
- 44) 40)に同じ
- 45) 39)に同じ
- 46) 森上「前掲書」p.312
- 47) 同上書 p.296